

伊賀市読書感想文コンクール審査結果

上野図書館が募集した第2回読書感想文コンクールに、市内の小・中学校・高校および一般の皆さんから昨年より31点多い296点の応募がありました。審査結果と特選作品を紹介します。(敬称略)

「老人と海」



柘植中学校3年
稲住 拓哉

「絶対にカジキマグロを捕えて、沖から無事に帰ってほしい。サンチャゴをバカにする周りの漁夫たちを見返してほしい。」

僕は、そんな願いを胸に、夢中になりながらこの本を読み進めた。彼は、周りの者から何と言われようと、自分の信念を貫き通す人。それは僕のがこれの生き方だ。

死闘ともいえるべきカジキマグロとの闘いは、まさにサン

チャゴ自身との闘いだ。四日間ろくに食べず、ただ、

カジキマグロを仕留めることだけに集中していた。はたして自分にそんなことができるだろうか。食べ物もない。周りは雲と水平線だけ。そんな所に、たった一人でカジキマグロを仕留めようとしている四日間。とてもじゃないができない。太陽が照りつける海の上で食料なしで、たった一人生活することなどまず常人には不可能だ。

そう考えるとサンチャゴは

すごい。

何歳になっているかは分からないが、引退してもおかしくない歳であるのは確かだ。

そんな老人サンチャゴの、体力、精神力、体の底からわき出てくるエネルギー、どれを取っても常人とはかけはなれている。

あきらめることなく、カジキマグロに立ち向かう姿勢。これが海の男か。大海原に、たった一人で挑む、力強い老人の姿が、目に浮かんでくる。アーネスト・ヘミングウェイという作家は、今までも耳にしたことがあり、一度読んでみたい作家の一人であった。

「老人と海」。話の内容も全く知らないまま、僕の想像はふくらんだ。青く澄んだ海、時に荒々しく、様々な表情を見せてくれる海。

■審査結果■

特選

【第1部】(高校生以上)
該当者なし

【第2部】(中学生)

稲住 拓哉(柘植中3年)

【第3部】(小学生)

森増 冴月(神戸小2年)
竹島 佑亮(玉滝小5年)

入選

【第1部】(高校生以上)

稲森あすか(上野高1年)

石橋 容子(四十九町)

福沢 義男(上野桑町)

【第2部】(中学生)

中井 宏美(成和中1年)

栗原 志歩(阿山中1年)

田中 利佳(成和中2年)

中村 陸(柘植中2年)

【第3部】(小学生)

西田 託也(玉滝小1年)

谷本 翔汰(久米小2年)

福増えりか(神戸小2年)

松本 佳純(河合小2年)

川辺 麻琴(上野西小3年)

法花 拓海(花之木小3年)

森川 澄麗(青山小3年)

久米 弘起(上野西小4年)

藤林 謙二(鞆田小4年)

岩瀬 翔子(上野西小5年)

福井 花奈(花之木小5年)

福井理絵子(猪田小5年)

藤山 貴之(依那古小5年)

岡森峻一郎(古山小5年)

河口 真樹(上野西小6年)

山中 希絵(上野西小6年)

工藤 奈那(上野東小6年)

豊田晋太郎(友生小6年)

高島 紬(鞆田小6年)

松岡 加奈(丸柱小6年)

【問い合わせ】

上野図書館

☎21・6868

「老人と海」の舞台は、アメリカから程近いキューバ。サンチャゴはやせこけて、うなじには深いしわが刻まれている。熱帯の海に反射する太陽の熱で褐色のしみができている。

彼は八十四日間、全く魚を捕ることができていない。周りからはバカにされ、今までサンチャゴを慕うマノーリンと一緒に、漁をしてきたが、それも父親から反対され、今は老人一人での漁である。

カジキマグロと闘っている時、サンチャゴは、マノーリンがいてくれたらと、何度も思う。行ったことのない海へ一人で向かうサンチャゴ。長年の勘だけを頼りに、今度こそ大物を狙う。孤独で、話をする相手もない船上で、老人は常に海や鳥、そして太陽に、話しかけた。その姿はとも印象的だ。自然を愛する心優しい人であることがよくわかった。

そんな時、確実に大物だとわかるあたりを手にする。それは、老人が漁にたずさわってきた中で最も大きな獲物だった。カジキマグロだ。尋常ではないその引きにサンチャゴはとまどいながらも、大き

な期待と幸せを感じていた。老人とカジキマグロの文字通り「死闘」の幕開けだ。見渡す限り海しか見えない。助けてくれる人もいない。老人の乗った小さな船が、カジキマグロによって激しく揺れる。僕はとも不安だった。マノーリンがいてくれたら、という思いと、どうか自分の手で捕まえてほしい、無事に帰ってきてほしいという思いが交錯した。すさまじい闘いだった。しかし、老人が敵に対して話しかける言葉には、ある種の友情に近い感情が生まれているようで、お互いを尊敬するような不思議な感覚だった。

四日目、ついに老人はカジキマグロに勝った。僕は嬉しかった。早くマノーリンに知らせたいと思つたし、サンチャゴをバカにする漁夫たちにも、サンチャゴの素晴らしさを教えてやりたかった。しかし、自然というものは残酷だ。帰港中、カジキマグロの匂いを嗅ぎつけた鮫の大群に喰い荒されてしまう。あの力強い死闘とは対称的な姿に、僕は悲しかった。しかし、これも現実であり、自然の厳しさなのだ。僕がサンチャゴなら悔しい気持ちでいっぱいだろう。で

もサンチャゴは、くやしいという気持ちよりも、悔いのない気持ちの方が大きかったと思う。死闘の末にカジキマグロを捕えたことに変わりはないし、誰かに認めてほしくて、今まで生きてきたのではなく、きつと自分に負けないように素直に生きてきた。それがサンチャゴが今まで生きてきた証でもあるし、充分だったと思う。そしてこれからも、誇りを持って生きていくだろう。

僕も勇気を持って生きていきたい。以前僕は、柔道の大会で、痛い思いをしたことがあり、それから、試合をするのが嫌になった。小学校二年生の時の出来事だが、今でもはつきりと覚えている。それも、嫌な思い出として……。怖いこと、嫌なことから逃げるのではなく、自身に負けないように、立ち向かっていきたい。それが、この本を読んで、この老人から学んだことだ。誰一人助けられない人もない荒波の中で、たった一人でカジキマグロと闘った老人の姿は、僕に勇気を与えてくれた。受験、卒業を控えた今、この本に出会えてよかったと思う。

おばあさんへ



神戸小学校2年 森増 冴月

わたしは、このお話をよんで、とても気もちよくなりました。

だから、おばあさんにお手紙を書きます。

おばあさん、お元気ですか。わたしは、おばあさんのおかゆ、おいしそうだから食べたいなと思つたよ。

おばあさんは、いつも一人でさびしくなかったの。

くまさんがドアの前にいたとき、すごくびっくりしたね。わたしもびっくりしてん。

くまさんってわかって、森の友だちってきいて、みんなでおかゆを食べてよかったね。

すてきなおきやくさんがきてくれてよかったね。

みーんなで、あったかいとろーとしたおかゆを食べられて、おいしさがなんばいにも

なつたのではないのかな。

大きなくま、小さいねこ、小さい小さいねずみ、そして小さいおばあさん、なかよくすわっていてわたしも、あつたかい気持ちになつたよ。

もう、おばあさんさびしくないね。

おばあさん、わたしにも、おばあさん二人いるんだよ。

九十才のおばあちゃんは、元気やで。じぶんまで百才まで生きるって言っているよ。

もう一人のおばあちゃん、わたしのおばあちゃん、は、わたしの学校にべんきょうを見にきてくれたり、ごはんのよういしてくれたりするよ。いろいろなお話をしてくれるよ。

わたしのおばあちゃんは、まつたけ大すきなんやけど、おばあさんはどうかな。

おいしかったのかな。
春は、かふんしようになら
ないの。
冬は、インフルエンザにか
からないの。

わたしのいえは、かぞくが
たくさんいるから、いつもに
ぎやかやで。

いもうともいるし、おじい
ちゃんもいるよ。おじいちゃ
んは、いっぱいやさいをつく
っているよ。

はたけいっばいあって、と
うもろこしやかぼちゃたくさ
んつくっているよ。

おばあさんに、とうもろこ
しやかぼちゃをあげられた
ら、おいしいスープつくって
もらえそうやな。どうかな。
おばあさん、今は、さびし
くない。

また、あたらしいおきやく
さんがきてるといいな。
もし、わたしが、トントン
とドアをたたいたら、
「どうぞ、お入り。」
とあけてくれるかな。

ぜひ、わたしもおばあさん
の友だちの一人にしてね。
わたしは、おみやげをもっ
ていくからね。

それでは、おばあさん、か
ぜをひかないようにしてね。
わたしは、おばあさんが大

すきだよ。
やさしいおばあさん、元氣
でね。

「野口英世」を読んで



玉滝小学校5年
竹島 佑亮

図書館の伝記コーナーに足
を向けると、そこで、「日本
が世界にほこる医学者・野口
英世」という本がぼくの目に
とまった。野口英世という人
は、どんなふうにしてりっぱ
な人になったのだろうかと思
い、その本を手にとって読み
始めた。

野口英世は、今から百年近
く前、さびしいなかの貧し
い家で生まれて、清作と名付
けられた。一才の時にいろり
に落ち、指がみんな曲がって
くっついてしまうほどのやけ
どをおった。しかし、英世は、
この不幸を乗り越えて、世界
中の人からうやまわれるほど

の素晴らしい大医学者になっ
た。英世は、どんな事にも負
けなかった。悲しい事やつら
い事があっても、なにくそと
がんばりぬいた。

英世は、お母さんのはげま
しと親切な小林先生の助け
で、高等小学校を卒業し、東
京に出て勉強を続けた。そし
て、とうとう英世の望み通り
医者になり、研究のためにア
メリカまで渡った。そして、
いろいろな病気の元になる菌
を発見し、世界の人のために
つくした。

英世が医者になろうと決心
したのは、やけどをした自分
の悲しい手を、友達や先生

達のおかげで治すことができ
た、その喜びからだ。医
者の力の大きいことを知っ
て、医者になって、困ってい
る人のために働こう。それが、
自分がお世話になった人々へ
恩を返す道だと考えたのだ。

アメリカに渡ってからの
ち、おそろしい黄熱病の研究
を続けた。その研究のために、
アフリカの奥地へも進んで出
かけて行った。そして、とう
とう自分も黄熱病にかかり、
遠いアフリカでなくなってい
まった。英世は、医者として、
学者として、自分の研究のぎ
せいになってたおれてしまっ
た。なんとということなのだろ
う……。

野口英世が、世界中の人か
らうやまわれ、たくさんのり
っぱな研究をなしとげること
ができたのは、英世自身がた
ゆまず勉強を続けたからでは
あるが、そのかげには、たく
さんの人の後押しがあった。
中でも、英世にとって、三人
の大きなかげの力をわすれる
ことはできない。その三人と
は、ふるさとの小林先生、東
京へ出てからの血腸先生、そ
してアメリカへ行ってからの
フレクスナー博士だ。この三
人の助けがなかったなら、世

界の偉人「野口英世博士」
は、生まれなかった。

けれども、英世がいつでも
力強い助けを受けることがで
きたのは、英世の熱心な努力
がこの人たちの心を動かした
からにちがいない。

野口英世博士は、神様でも
なければ、コンピューターで
もない。ぼくと同じ人間だ。
ぼくが、野口英世博士のよう
に大医学者になることはでき
なくても、真げんに勉強をし
て、世のため、人のために役
立つ人間になることはでき
る。ぼくも熱心に勉強し、努
力をして、どんな困難にも負
けず、いつかはりっぱな人間
になろう。その思いを強く胸
にきざんで、これからも、ほ
くにできることから始めてい
こうと思った。

